

しだれつゝこの世の花と咲きにけり

藤田湘子

古代の日本人にとって「花」と言えば梅であった。しかし、平安中期以降、まして太平洋戦争を潜り抜けた世代にとっては「花」は桜と教えられ、忠孝友和信愛の道徳感や、予科練・同期の桜に象徴される散り際の良い従順な国民を育てるために利用されてきた一面もある。

昭和十六年、満十五歳になった湘子は学費を得るため鉄道省東京鉄道教習所で働く。かつては軍国少年として飛行機乗りや航空機設計士にも憧れていたそうだ。

枝垂桜の開花は一般的な桜のソメイヨシノよりも遅い。この句を成した昭和五十七年、「藤田湘子を祝う会」が銀座東急ホテルで開催され、乾杯の音頭は馬渡一真（国鉄副総裁）氏、と湘子年譜には記されている。